

余話

木瓜と花実 ぼけ かじつ

桜や桃の花が咲くころ木瓜の花も咲く。木瓜は中国原産で高さは大人の背丈ほどになる。しかし、日本の庭園では刈り込みを入れるので低木としての印象が強い。だから、花も実も人目につきにくいのだ。もっともこの木はバラ科なので棘があり、高木にすると子どもには危険である。

私が子どもの頃、家にこの木があり、一つの株から春に紅色、淡紅色、白色、さらに絞りと色とりどりに咲くこの木の花が私には不思議であった。この花が咲くころは桜に続く桃の花が真っ盛りで人々は足元の木瓜に関心を示すことは少なかった。確かに見渡す限り一面に咲き広がった桃の花は、桜花よりも艶やかで眺める者を氣恥ずかしくさえした。正確には、桃の花はピンク色ではなく桃色そのものとしか言いようがない色なのだ。人々が足を止め暫く佇み見入るのも無理はない。花は花期が終わるとお役御免となるのが、人間の知恵は人口受粉や摘果という方法で桃の木に見事な実をつけさせる。

クレパスをすべて使ったような花を咲かせた木瓜はその後どうなるのであろうか。一般的に美しい花を咲かせた花木は良い実をつけ

ないと云われている。ところが木瓜は大きな梨ほどの実をつけるのである。この実が桃や梨と違うところは霜が降る頃まで実を付け続けることである。しかも、それぞれの実はしっかりと親木にしがみつ き黄色に色づいて、見るからに美味しそうになる。野鳥がこれを見逃すはずはないのだが、カラスもヒヨドリも見向きもしない。もしかしたらこの実には毒が含まれているのかも知れない。子どもの好奇心はある時これを齧^{かじ}らせた。堅い！歯が立たない。なるほどこれでは野鳥も歯ならず嘴が立たないのだろう。それにしてもあの春の柔かく美しい花はどうしてこんなにも堅い実をつけるのだろう。天は二物を与えないと良く云われるが、木瓜も見事な花の代わりに堅い果実しか与えられなかったのかも知れない。

やがて雪が降り、さすがの堅い実も地面に落下する。これを拾う人も啄ばむ野鳥もなく、木瓜の実はそのまま次の春まで冬眠に入る。しかし、翌年に新芽を出すのは極めて少数である。植木屋さんの店先には小鉢に入った若芽が沢山並んでいるので、その訳を聞いてみると新芽の挿し木だと云う。人間とはいろいろな方法を考え出すものである。アダムとイブではないが、「始めに親ありき」で始祖の実に興味を感じないではいられない。

私ごとで恐縮だが我々夫婦は易学から言うと相性は大吉である。

五十年近く生活していると二人の性格の違いが怖いほどに解る。考
え方や価値観は永年の生活で少々似通ってくるが。食べ物の好みや
基本的な生活の考え方に齟齬が生じていることが見え隠れしてくる。
もっとも家計を一切任されている主婦が経済観念の希薄な私と同じ
では家計はすぐに破産してしまうだろう。

家内は戦前の小作農家の長女として生まれた。私は音楽家の端く
れの末っ子として生まれた。家内は中学校を出ると、直ぐ大病院の
準看護婦現在は看護師として寄宿生活をしながら看護婦養成所で
過ごした。私の方は二十歳のとき一家が離散し結婚するまで一人住
まいであった。しかも、私の教員生活は十五年間単身赴任であった
のである。結論的には二人とも早くから親元を離れ、それぞれに一
人住まいが長かったということになる。しかし、これも天の配剤で
この違った生き方が退職後お互いの退屈さを救った。

家内の好物は食べ物では肉系、私は野菜系である。驚いたことに
家内は私の好物のジャガイモを一かけらも食べない。さらに、家内
の主食は米の飯でないと満足しない。私は麺類が好物である。

妄信している訳でもない「易経」をいつも念頭に置いていたから

大凶の我々の二人は、何とか此処まで来られたのではないかとさえ思える。「易」は本来「易える」ことが原義であるから危険に近づくことなく、故意に道を外さなければ危機の方から避けてくれる。ところで、人間にも植物の周期のように成長期、花期、繁茂期、就実期があるように思える。人間は誰でもが生涯を青春期で過ごしたいと思っているに違いない。しかし、輪廻はそれを許さない。となると、方法は唯一つ、生涯の過ごし方を考えるしかない。周りはどうあれ長い時間を過ごすのは家族であり、長寿社会の晩年は夫婦二人となる。この一見退屈そうな二人が喧嘩もしないで過ごすには妙案がある。

お互いの行動に干渉したり、束縛したり苦情を言ったりしないことである。さらに、家内の作った食事には「美味しいとか不味いとかは言わない」美味しいと言わないときは不味いという反応になってしまふからである。二人だけの会話は種切れになることもあるが、世間話でもいいのでお互いに食事の時ぐらいは本気になって話す。このとき、相手の言い分を肯定してから入ることを心がける。いきなり否定されると会話はそこで断ち切れてしまう。子や孫の育て方は当然親としての義務は果たすが、孫には過干渉しない。孫に小遣い

などやるのはもつての他である。これが習慣になると祖父母は打出の小槌に変化してしまう。孫への小遣いも必ず親を経由して渡るようにする。親から親への感謝は孫も見ているものである。夫婦は固有の趣味を持ち、独自の行動パターンを維持する。

真の愛情は平凡でも永続性のあるものであることが望ましい。男も女も一緒になれば「一」＋「一」だが、「二」という答えにはならない。夫婦と言えども全く違った環境で育ち、考え方も違うのだから意見が一致するなどあり得ないのである。そもそも、天は人間を不完全なものとして創られたのであるから、夫婦は共に不完全のままで良いのではないのか。この自覚が体されて人間は初めて一人前になるのかも知れない。

木瓜の花や実も何か深い訳があつて、花は美しくその実は堅くしているに違いない。この堅い実も次の年の春には、あの美しい花々の糧にはなるのである。世の中に無駄なものはない。人間自身が無駄を作っているのだ。そのことに気付いた頃には、余生はあまり残っていないが、人間は性懲りもなく「サミュエル・ウルマン」の「青春」を求めて生きている。葉を落とした木瓜の実は、枯れ枝の中で無用の用の存在感を一際誇示しているかのように見える。